

Christopher Marlowe の戯曲に頻出する「金銭」について考える

著者	坂本 つや子
雑誌名	Philologia
巻	40
ページ	59-81
発行年	2009-02-01
その他のタイトル	The power of money in Christopher Marlowe's plays
URL	http://hdl.handle.net/10076/10608

Christopher Marlowe の戯曲に頻出する「金銭」

について考える

The Power of Money in Christopher Marlowe's Plays

坂本 つや子

(Tsuyako Sakamoto)

マーロウの戯曲には金銭⁽¹⁾に関する言及が多く見られる。それぞれの作品について検討していく。

1 フォースタスと貨幣

「悪魔との契約」というファウスト伝説に基づくプロット⁽²⁾がクローズアップされがちな *Doctor Faustus* において、「金銭」は背後に隠された重要なテーマと言える。主人公フォースタスは魔術を学ぶことを決意し、^{スピリット}悪魔を使って西欧圏の外にある世界の富をかき集め享受することを夢想する。この西欧とは異なる気候サークル—具体的には南半球ではなく、インドその他の暖かい国々⁽³⁾—に属する世界の可能性については、彼が祖国ドイツの Vanholt 公爵の宮廷において、懐妊中の夫人のもとに応じ、厳冬の季節に葡萄を持ってこさせるシーンの台詞からも伺える。このエピソードは彼が、夏至に近い聖ペテロの日（6月29日）に、ローマ法王庁で行われた、口腹の欲を満たすことに始終する宴会において、聖餐を思わせる^{モーロ}食物とワインを奪ったエピソードと対をなすと考えられる。フォースタスは世界をくまなく旅したのであるが、そこには天上、地上、地獄という、法王の三重冠の表象する世界に含まれない別のサークルがあったと考えられないだろうか。少なくとも彼がスピリットの力を借り、二重のサークル—「ドイツ全土に真鍮の城壁を巡らせる」「大学都市の周囲にライ

ン河を巡らせる」—によって守ろうとした世界は、その宗教思想において、ローマとは別のサークルに属していると言えよう—

I'll have them (i.e., spirits) wall all Germany with brass
And make swift Rhine circle fair Wittenberg.
I'll have them fill the public schools with silk,
Wherewith the students shall be bravely clad.
I'll levy soldiers with the coin they bring
And chase the Prince of Parma from our land,
And reign sole king of all our provinces;

(*Doctor Faustus*, i.i.90-96)

フォースタスは“spirit”たちの力を借りて国家と思想の中心地を守ろうという意気込みを見せる一方、彼らに持ってこさせた「貨幣」を使ってカトリックの脅威を象徴するパルマ公を撃退し、自ら王となって領国（おそらくドイツ全土）を統治するため、徴兵を行おうとする。この時点で彼は支配権を得るためには、中世的な魔力の発揮する力よりも、軍資金としての近世的な「貨幣」のもつ力の方を上位に置いていることが分かる。

この作品では「金銭」は支配者の第一の役目である国防を行う上で、絶対的な力を持つことが明示されるが、これはマロー戯曲に共通するテーマである。フォースタスが神聖ローマ皇帝カルロス五世の宮廷に伺候するシーン（4幕1場）においては、「金銭」の使い方が、君主の力量と品格を判断する物差しになっている。このエピソードでは、962年に初代がローマ教皇の手で戴冠して以来の帝国の征服と栄光の歴史が今や翳りつつあることを憂慮した皇帝が、偉大な征服王であるマケドニアのアレクサンダー大王の姿を見ることで起死回生の活力を得ようと試みる。しかしフォースタスが魔術の力で呼び出したアレクサンダーとその寵姫の姿（実は悪魔^{スベリット}が演じている）を目の当たりにした時の皇帝の振る舞いは、先人の例に学んで国家の立て直しを計る

統治者に相応しい態度ではなく、法王庁の場合と同じ、墮落した宮廷の享乐的な君主の姿でしかない。皇帝はアレクサンダーよりその寵姫の姿に関心を示し、彼がその鑑であるべき宮廷の礼節を破って、絶世の美女のうなじに、生前あったといわれる黒子の有無を確かめたがる。“Your Highness may boldly go and see. (IV.I.71)”というフォースタスの台詞は、学者としての彼の知的優位性を示してはいるが、好奇心を満たそうとする皇帝の、冒流的な振る舞いを止めることは出来ない。皇帝がフォースタスに「気前の良い謝礼(IV.I.99)」を約束するシーンは、この宮廷において起こった出来事全てに対し、当否の判断という点で、決算書を突きつける効果があると言える。「金銭」の授受は皇帝とフォースタスの身分階梯におけるそれぞれの位置を一気に決定する。国家の敵を撃退するほどの魔力を備えたフォースタスは、金を受け取ることで、支配者の気まぐれな欲望に奉仕すべく、知識を駆使して目先の変った余興を提供する学者/エンターティナーとして位置づけられてしまう。他方、大金を使ってフォースタスの能力を買った皇帝は、彼の助けを借りて傾きつつある帝国を立て直す判断もあったのに、国庫の金とフォースタスの能力を宴会の余興のために浪費してしまうことで、統治者としての無能力を証明することになる。

2 タンバレン—言葉の錬金術

Tamburlaine the Great, Part One は、スキタイの羊飼であったタンバレンが、ペルシャ王国⁽⁴⁾を征服して自ら国王となり、最初から彼に従ってきた人々にも後に征服した諸国を分け与え、衛星国の王に任命するというプロットを軸に展開する。ペルシャは外敵の脅威に加え、無能な国王マイセティーズと、兄に取って代わろうとする野心家の弟コスローの確執のため、不安定な状況にある。マイセティーズはトルコ人とタートル人が国王に刃を向け、「領土を所かまわず切り取ろうとしている (1.I.I.16-17)」現状を知りながら、貴族たちを祖国防衛に駆り立てる力を持つ、「雷鳴のようにとどろく大いなる言葉」を語ることが出来ない—

Brother Cosroe, I find myself aggrieved

Yet insufficient to express the same,

For it requires a great and thund'ring speech:

(Tamburlaine, 1.I.I.1-3)

マイセティーズはコスロー側の貴族たちの意見を入れて、弟の息のかかっていない貴族セリダマス―“The chiefest captain of Mycetes' host (1.I.i.58)”―に一千の兵を与え、五百の兵力しか持たない「盗賊」タンバレン追討を命じる。このように彼は弟の策にはまり、セリダマスの力量に不釣り合いな任務を与えたのみならず、唯一中立的な人物を身边から遠ざけてしまう。

一方ペルシャ軍を迎え撃つタンバレンの作戦を見ると、卑賤な身分から天上の高みまで駆け上ろうとする男が、何を拠り所としているかがよく分かる―

Open the mails, yet guard the treasure sure;

Lay out our golden wedges to the view,

That their reflections may amaze the Persians.

(Tamburlaine, 1.I.II.138-140)

タンバレン軍の中心には、盗賊稼業で手に入れた莫大な財宝がある。彼は金塊をしっかりと護衛させながらも、よく見えるように展示して、その輝きでペルシャ軍を驚かせようとする。この一見子供じみて見える仕掛けの思慮深い意図は、彼がセリダマスを味方に引き入れるため熱弁を振るうシーンと併せて考えると明らかになる―

In thee, thou valiant man of Persia,

I see the folly of thy emperor:

Are thou but captain of a thousand horse,

That by characters graven in thy brows,

And by thy martial face and stout aspect,

Deservest to have the leading of an host?
Forsake thy king and do but join with me,
And we will triumph over all the world.

. . .

See how he (i.e., Jove) rains down heaps of gold in showers
As if he meant to give my soldiers pay;
And as a sure and grounded argument
That I shall be the monarch of the East,
He sends this Soldan's daughter rich and brave
To be my queen and portly empress.

(*Tamburlaine*, 1.1.II.165~186)

タンバレンはセリダマスの威厳ある風貌を見て、彼が自らの力量にふさわしい役目を与えられていないことを瞬時に見抜き、「部下の能力を生かすことが出来ない無能な王に仕えるより、世界征服を目指す自分に味方しろ」と語りかける。タンバレンはセリダマスを説得するとき、軍資金として莫大な財宝を所有していること、並びに自分が「東洋の君主」となるためのいわば資格授与者として、「美貌で裕福なサルタンの姫君」の捕虜を確保していることを力説する。

タンバレンはセリダマスを前に、自らの力量で獲得した「金塊」と「姫君」という素材を使い、言葉の「錬金術」により、「王」の神話を紡ぎ出す。彼は金塊について、「神がタンバレンの頭上に降り注いだ黄金の雨」であると表現する。これは自分が神により聖別された王であると言うに等しい言葉である。同時にこの金は現実的には、彼の率いる戦闘集団が、当初の目標を達成するまでに必要な軍勢力を維持するための経済基盤を確保していること、目に見える証拠となる。これは無力な国王のもとで軍律もゆるみ、また昔は戦争で獲得した捕虜の身代金のせいで裕福であったが、今では給金にも事欠いているペルシャ軍の現状を指摘するコスロー派貴族の国王批判の言葉一

The warlike soldiers and the gentlemen
That heretofore have filled Persepolis
With Afric captains taken in the field—
Whose ransom made them march in coats of gold,
With costly jewels hanging at their ears
And shining stones upon their lofty crests—
Now living idle in the walled towns,
Wanting both pay and martial discipline,

(*Tamburlaine*, 1.1.1.140-147)

を念頭に置いて考えると、指導者の力量がその集団の浮沈を決定する証左として、ますます重要性を増す。またタンバレンが「ゼノクレイティ姫」との結婚を仄めかしたことは、王族の配偶者として、彼自身が権力者たちの身分階梯のなかに場所を得る可能性を示すことである。このように、タンバレンは、自らの力量で得た財宝と姫の美貌と血統を素材に、彼の力量の重要な部分をなす「雄弁」の力を使って、ヘルメスの技である錬金術のように、卑しい羊飼いである自らを「聖なる＝正統の支配権保持者」へと変容させるのである。ここではヘルメスのごとき弁舌の才に恵まれたタンバレンと、部下を鼓舞する「雷鳴のごとくとどろく大なる言葉」を欠いたペルシャ王とが鮮やかに対比されている。セリダマスは聞き手の心を揺るがすタンバレンの言葉を、「神々の代弁者であるヘルメスさえ、これ以上感動的な説得の言葉を駆使できないだろう (Not Hermes, prolocutor to the gods, / Could use persuasions more pathetic (1, I.II.209-210) 」と評価し、ペルシャ帝国の貴族という正統的立場を捨て、彼の側につくことを決意する。

3 パラバス—金銭と宗教

The Jew of Malta の舞台となるマルタ島は、ロードス島を追われた聖ヨハネ騎士団の新しい根拠地である。しかしマーロウ作品では、ここは「宗教的パースペクティブ

から見た世界の縮図」として描かれている。⁽⁵⁾ 騎士団長ファーニーズも総督と呼ばれており、トルコとの関係その他も史実と異なる設定になっている。異教徒たちの集合場所であるマルタで通用する唯一の共通言語は「金銭」である。総督はトルコ帝国の使者に十年間滞納していた朝貢金の支払いを督促されたとき、財産保護をキリスト教国の軍事力に依存し、安上がりで安全に商売していたユダヤ人商人たちを、「兵士」に対する“moneyed man (I.II.53)”と規定し、彼らに三つの選択肢—①財産(estate)の二分の一を差し出す。②直ちにキリスト教徒になる。③何れにも同意せぬ場合、全財産を没収される。—の中から一つを選ぶよう強要する。この提案はファーニーズがユダヤ人たちに、彼らのアイデンティティの象徴である「金銭」によって、「ユダヤ教徒としてのアイデンティティ」を維持したまま、カトリックの砦に安住する権利を、改めて買い取れと要求していることになる。

「金」は権力を持たないユダヤ人バラバスにとって、自らの実力を世間に見せつけるための唯一の表現手段である。三つの選択肢をすべて拒絶し、総督に家屋敷と全財産を没収されたバラバスは、隠し持っていた財産を使って、新たに「総督邸に匹敵する」家を購入し、島の最高権力者と同じステータスを誇示する。バラバスが総督の息子ロドウィックに、一人娘アビゲイルを嫁がせると偽りの約束をするシーンでは、「金銭」の力により、いわば^{マフ・ソム・キス}二流市民であるユダヤ人が、そのアイデンティティを維持したまま、一流市民と同格になるという図式が示される—

Oh but I know your lordship would disdain

To marry with the daughter of a Jew:

And yet I'll give her many a golden cross

With a Christian posies round about the ring.

(*The Jew of Malta*, II.III.296-299)

バラバスは総督の息子に、ユダヤ娘と結婚する代償として「キリスト教の聖句」が刻まれた多数の「十字金貨」と「結婚指輪」⁽⁶⁾ を与えると約束する。ユダヤ商人た

ちが、大金を支払うことと引き替えに「ユダヤ教徒として生きる」許可を手に入れたのと同じように、ユダヤ娘の結婚についても、花婿候補である総督の息子に社会的不利益を与える理由である「ユダヤ教徒」という欠点か、嫁入り持参として彼女に添えられる、キリスト教信仰の代用品としての財産、すなわち「十字架とキリスト教の聖句の刻印された金貨と指輪」を付け加えることによって補われている。

4 ダイダー—所有者に権力を与える金銭

Dido, Queen of Carthage は、ウェルギリウス作、『アエネーイス』（以下英文または英語読みで表記する）に描かれた、カルタゴの女王ダイダーの、トロイの王子イーニ阿斯への悲恋物語を底本にしている。マーロウ作品では、繁栄してはいるが歴史の浅い北アフリカの新興国の女王ダイダーは、滅亡はしたが由緒ある歴史を持つ中央の大国の王子イーニアスを経済力で支配し、体制内に取り込もうとする。しかし彼女の援助で徐々に力を蓄えたイーニアスは、やがて大国家再建の使命を自覚するに至り、カルタゴを捨て、イタリアをめざす。

ヴァージル作品では、イーニアスの持つ神性は不動の属性である。しかしマーロウ作品では、背景と財力とを失った彼に神性はない。*The Aeneid* では女王ダイダーは、トロイ戦争の様子を描いた壁画で飾られたジュノー神殿で、イーニアスに対面する。イーニアス一行はこの時点まで母神ヴィーナスが作った雲によって、人々の目から隔てられている—

These words were hardly spoken, when in a flash the cloud-cloak
They wore was shredded and purged away into pure air.
Aeneas was standing there in an aura of brilliant light,
Godlike of face and figure: for Venus herself had breathed
Beauty upon his head and the roseate sheen of youth on
His manhood and a gallant light into his eyes;
As an artist's hand adds grace to the ivory he works on,

As silver or marble when they're plated with yellow gold.

(*The Aeneid, Book I, 586-593*)

ヴィーナスはイーニ阿斯を覆い隠していた雲を霧散させるが、その前に彼に青春の息吹を吹きかけ、長旅の苦勞の憂れが女王の目に悪い印象を与えないよう気を配る。ヴァージルは彼の美しさ、高貴さを描写する際、比喻として「象牙」「銀」「大理石」「黄金」という、「財宝」を思わせる表現を用いている。*The Aeneid* ではイーニ阿斯は、女王がトロイの兵士たちに食料を下賜してくれたことに対する答礼の贈り物として、落城の際に辛うじて持ち出せたトロイ王家の財宝を贈っている。トロイの高い文化水準を証する品々はカルタゴの人々を驚嘆させる (*Book I, 647-656*) —しかしここでは、王子でありヴィーナス女神の息子である彼自身が、人々の目に象牙、大理石、金銀といった貴重な素材を用いて芸術家の手で作られた「財宝」と映ることが示唆されている。

マローウ作品では人間の価値がその人自身の価値でなく、所有する「金銭」の多寡によって評価され、豪華な衣装がその表象となる。カルタゴに漂着したイーニ阿斯は途中ヴィーナスに出会い、ダイド一の宮殿に行くことを勧められるが、人々の前に姿を現すときは、雲ならぬ襜褕をまとった姿のままであり、神性の輝きが襜褕を通して人々の目に映ずることもない。別の場所に漂着した部下たちは、先にダイド一の求婚者であるガエトウーリ王アイアースに行き会い、「トロイ人」という理由で「豪華な衣装」を与えられている。彼らはイーニ阿斯に出会った時、声は認めたものの、みすばらしい外見から本人と分ならず、イーニ阿斯一行も立派な外見から、相手が仲間のトロイ人たちであると分らない。イーニ阿斯が部下たちに導かれてカルタゴの宮殿に行き、ダイド一に会う場面では、女王は襜褕を纏っているにもかかわらず、自分を無遠慮に見つめるよそ者の男を不審に思っ「名」を尋ねる—

Illioneus. Look, where she comes: *Aeneas*, view her well.

Aeneas. Well may I view her, but she sees not me.

Enter Dido, Anna, Iarbus, and train.

Dido. What stranger art thou that doest eye me thus?

Aeneas. Sometime I was a Trojan, mighty queene;

But Troy is not, what shall I say I am?

Illioneus. Renowned *Dido*, 'tis our Generall,

Warlike *Aeneas*.

Dido. Warlike *Aeneas*, and in these base robes?

Go fetch the garment which *Sicheus* ware.—

Brave prince, welcome to Carthage and to me,

Both happie that *Aeneas* is our guest:

Sit in this chaire, and banquet with a Queen,

Aeneas is *Aeneas*, were he clad

In weeds as bad as ever *Irus* ware.

(*Dido*, II.I.72-85)

ここでは「名声ある」ダイドーと、「トロイが滅びた今」すなわち背景と財力を失った今、名乗るべき「名」を持たないイーニースとが対比されている。女王は襦袢を纏った彼の姿を、オデュッセイアに登場する卑しい乞食イーロスに準える。彼はダイドーが与えた「亡夫シュケイオスの身につけていた衣服」を、何のためらいもなく身につける。女王がイーニースに、「トロイの王子」にふさわしい歓迎の挨拶を述べ、「襦袢をまもっていてもイーニースの値打ちは変わらない」と言うのは、彼女がトロイ人たちに教えられて初めて彼の「名」を知り、自らの財力によって彼の外見を整え、宴席の決定に象徴されるように、カルタゴの身分階梯の中に組み込んだ時である。

ダイドーとイーニースが結ばれる場面—

Sicheus, not *Aeneas*, be thou calde:

The king of *Carthage*, not *Anchises* sonne:

Hold, take these jewels at thy Lovers hand,
These golden bracelets, and this wedding ring,
Wherewith my husband woo'd me yet a maide,
And be thou king of *Libia*, by my gift.

(*Dido*, III.IV.57-64)

では、洞窟を出たダイドーは、イーニースに、亡夫シュケイオスから贈られた黄金の腕輪や結婚指輪を与える。これらの品々は男女の役割を入れ替えて、権力と財力を持つ女性から、無力な男性に与えられたと言っていいだろう。ダイドーはカルタゴの支配権と引き替えに、イーニースに「アンカイセスの息子イーニース」という「名」と使命を捨てさせ、すなわちトロイの王族であることを捨てさせ、改めて「シュケイオス」と名乗らせることで、カルタゴの支配体制の中に取り込もうとする。彼女の失敗は支配下に置いておきたい者に権力と財力の両方を与えることの危険に気付かなかったことにある。「女王からの贈物」として「財宝」と「王権」を纏めて手に入れたイーニースとトロイ人たちは、ダイドーが建設したカルタゴの「狭苦しい城壁」を打ち壊し、その跡にイーニースの親子三代の名にちなんで名付ける積りみのトロイ風の都市を建設する、あるいはニュー・トロイ建設のため船団を整えて出発するという、いずれの選択も容易に行う力を獲得することで、女王の支配下から逃れてしまう。

5 エドワード—流動する身分と金銭

Edward the Second は、「金銭」の力が身分階梯を流動化する様子を克明に描いた作品である。エドワード一世の崩御で国外追放を解かれ帰国したギャヴェスタンは、エドワード二世をロンドンの街を照らす「昼夜を分かたず輝く極地の太陽」に喩え、その恵みを手に入れた今、「もはや貴族たちに腰をかがめる必要はない」と言う一

The sight of London to my exiled eyes
Is as Elysium to a new-come soul;

Not that I love the city or the men,
But that it harbours him I hold so dear—

. . .

What need the arctic people love star-light
To whom the sun shines both by day and night?
Farewell base stooping to the lordly peers;
My knee shall bow to none but to the king.

(*Edward II*, I.I.10~19)

この台詞は、ギャヴェスタンの期待するエドワード二世の寵愛が、彼に富と高い身分とをもたらす性質のものであることを示している。ここでは「太陽」は、エドワード二世の王としての表象であるとともに、新王がギャヴェスタンに自由に引き出す許可を与えることになる、「国庫」に積まれた黄金でもある。すなわちここでは王の聖性と経済力が、象徴としての「太陽」を通して一体化していると考えられる。

「金銭」の「身分」に及ぼす力は、寵臣たちと歴代の貴族たちの軛轢を通して、より明らかになる。祖先が十字軍遠征にも参加したことを誇る、⁽⁷⁾ 由緒正しい貴族モーティマーJuniorは、金びかのイタリア風衣装を着て宮廷を我が物顔に闊歩するギャヴェスタンを皮肉って、すべてを金に変える「ミダス王」に喩える。しかし寵臣の被る「王冠の値打ちを超える(I.IV.414)ダイアを飾ったトスカナ帽は、王の愛顧によって得られた身分の上昇が、莫大な「金銭」の裏付けによって一時的な現象でなくなり、やがて彼らが歴代の貴族たちを超えて、玉座の足下まで這い上がる存在になる可能性を示唆している。王に迫ってギャヴェスタンをアイルランドに追放した貴族たちが、王妃イザベラの説得により、追放取り消しの方が得策であると判断し直すシーンでは、王妃派の第一人者であるモーティマーJuniorは、ためらう貴族たちに、ギャヴェスタンがアイルランドに国王から贈与された「金」を貯蔵していることに言及し、この資金を用いて味方を「買う」ことにより、全貴族中最強の者に対しても敵対すると警告する—

Know you not Gaveston hath store of gold,
Which may in Ireland purchase him such friends
As he will front the mightiest of us all?

(*Edward II*, I.IV.258-260/下線筆者)

この台詞において着目すべきは、物品その他を買うときに用いる“purchase”という言葉が、「金で味方を買う」という文脈で用いられていることである。これは王が第二の寵臣スペンサー父子を厚遇するエピソードと、貴族たちに対する仕打ちを比較すればより明らかになる—

Spencer (i.e., Spencer Junior), I here create thee Earl of Wiltshire,
And daily will enrich thee with our favour
That, as the sunshine, shall reflect o'er thee.
Beside, the more to manifest our love,
Because we hear Lord Bruce doth sell his land,
And that the Mortimers are in hand withal,
Thou shalt have crowns of us t'outbid the barons;

(*Edward II*, III.I.49-55/下線筆者)

王はスペンサーJ Rにウィルトシア伯位を与えた上、さらに「余の愛顧により、日毎に富ませよう」と約束する。その現実のやり方は、ギャヴェスタンに対するときと同じく、惜しみなく金銭を与えることである。しかしギャヴェスタンに国庫の「黄金」を与えた王は、スペンサーJuniorに対する贈り物には、より実際的な表現である

「^{クロー}王冠」金貨という言葉を使っている。そしてこの「王冠」の刻印のある金貨は、王の指示により、モーティマー一族も狙っている、ウェールズのウィリアム・ドゥ・ブルースの領地を購入するために用いられることになる。エドワードの台詞—「余がク

ラウン金貨を与えるので、これを使って貴族たちより高値を付ける（出し抜く）がよい」一からは、土地所有に基づく封建諸侯たちの身分秩序が、もはや不動のものではなくなりつつあることが感じられる。すなわち、ここではブルースのような領地経営に失敗した貴族たちによって、封建貴族たちの身分の根幹をなす「領地」がたやすく売買換金され、新たな土地所有者を生んでいること。そこに王による恣意的な位階再編の動きが加わり、新たに参入してきた成り上がり物たちが、「爵位」と「領地」を手に入れることによって、歴代の貴族たちの既得権を脅かすに至るということが伺える。

封建諸侯たちの「領地」について言えば、国王にギャヴェスタン追放をもとめる貴族を代表して、ランカスター伯爵は、ランカスターの他に彼の持つ四つの伯爵領ーダービー、ソールズベリ、リンカーン、レスターーを売却した金で軍資金を調達し、反旗を翻すぞといって国王を脅迫する一

Lancaster. My lord, why do you thus incense your peers,

That naturally would love and honour you

But for that base and obscure Gaveston?

Four earldoms have I besides Lancaster—

Derby, Salisbury, Lincoln, Leicester;

These will I sell to give my soldiers pay

Ere Gaveston shall stay within the realm.

Therefore if he be come, expel him straight.

(*Edward II*, I.i.98-105/下線筆者)

彼らが国王を「敬愛」するという、貴族として「自然」な態度を捨て、国家の身分階梯を覆す「不自然」な行動に出ようとするとき、すなわち国王に反旗を翻そうとする時、領地は軍資金に換金され、兵士たちの給与となる。この結果、王国の身分階梯の

中に確たる位置を占めていた諸侯たちは、身分の根拠である土地を失って流動化する。

領地が商品として売買の対象になることは、国家のためスコットランド軍と戦って捕らえられたおじの身代金支払いを国王にもとめ、拒否された時の、モーティマー Junior とランカスターの対話に示されている—

Mortimer Junior. Wigmore shall fly, to set my uncle free.

Lancaster. And when 'tis gone, our swords shall purchase more.

(*Edward II*, II.ii.195-196/下線筆者)

先に引用したランカスターの“sell”, “pay,” という言葉に加えて、ここでは貴族たちが代々相続してきた領地について、“fly (i.e., be quickly sold)”, “purchase”という、やはり商取引を思わせる言葉が用いられている。大土地所有を背景に確固たる身分を誇ってきた貴族たちが、大切な領地を金銭の調達のため即座に「売却」と宣言すること、さらに実力で領地や身分を獲得する成り上がり者や傭兵隊長の時代のように、剣によってさらに大きな領地を「買う」と言うことは、国王と貴族たちの関係を規定していた英国の身分秩序が、金銭の力によって形骸化、流動化したことを示していると言えよう。

6 イザベラと金銭

金銭の持つ力が身分秩序を覆す例は、王妃イザベラを取り巻くエピソードにも示されている。王と寵臣たちがすべての利権を独占する宮廷に嫌気がさした貴族たち、高位聖職者たちは、森に集結し、反国王グループを結成する。同じ理由で居場所を失った王妃イザベラも森に向かい、彼らと合流する。ランカスター伯爵は王妃の悲しみを見て、「フランス王の妹」が非道な目にあっていることに対し、貴族たちの注意を喚起する—

Look where the sister of the King of France

Sits wringing of her hands and beats her breast.

(*Edward II*, I.IV.187-188)

今や王妃としての立場を失ったに等しいイザベラに向かい、貴族たちを代表するランカスターが、本来の呼び方である「王妃」の呼称を用いず、“the sister of the King of France”と呼びかけて敬意を表したこと、すなわち、彼女が英国と比べ、当時遙かに威信のあったフランスの王女であることを強調したことは非常に意味のあることである。この点においてイザベラと貴族たちの同盟は、伝統的な身分階梯の枠内に安住してきた人々の同盟ということが出来よう。しかしながら先に示唆したように、イザベラの身分のもつ力は、彼女がフランス王の助力を得るため、皇太子エドワード（後のエドワード三世）を伴ってフランスに渡ったとき、金銭に比して無力であることが明らかになる。すなわち彼女の兄であるフランス王も、臣下たる貴族たちも、エドワード二世王が先手を打ってバラ撒いておいた「金」の持つ力に捉えられ、「妹」であり「王女」である人の、権利回復/身分秩序の回復、のための援助を拒絶する一

Isabella. Ah boy, our friends do fail us all in France.

The lords are cruel and the King unkind.

(*Edward II*, IV.II.1-2)

Edward. The lords of France love England's gold so well

As *Isabella* gets no aid from thence.

(*Edward II*, IV.III.36-37)

7 反逆とは何か

「大逆罪」の判定もまた、金銭を基準にして下される。作品では死に至るまでエドワード二世に、歴代貴族に勝る忠誠を尽くしたスペンサー父子を、王妃側のウェール

ズ人、ライス・アップ・ハウエルは、共和制時代のローマの国家反逆者カティリーナに喩える。彼は父子の罪名を「英国の富と国庫の中身を蕩尽した」ことであると規定する。これは言い換えれば彼らが国王に対して忠誠であったとしても、「国家」に対しては不忠であったとする、近代的な考え方に基づいているといえる一

Rice ap Howell. God save Queen Isabel and her princely son.

[*Pointing to the Mayor*] Madam, the mayor and citizens of Bristol,

In sign of love and duty to this presence,

Present by me this traitor to the state---

Spencer, the father to that wanton Spencer,

That, like the lawless Catiline of Rome,

Revelled in England's wealth and treasury.

(*Edward II*, IV.VI.46-52)

すでに述べたように、劇中エドワード二世は寵臣に恩恵を与える自らを、好んで、黄金の光を放つ太陽に喩えている。捕らわれてキリングワース城に送られた王が、嗣子エドワードへの譲位という名目のもと、王冠を王妃とその愛人であるモーティマー Junior 一派に渡すことを強制されたときの台詞一

But stay awhile; let me be king till night,

That I may gaze upon this glittering crown;

. . .

Continue ever thou celestial sun;

Let never silent night possess this clime.

Stand still you watches of the element;

All times and seasons rest you at a stay,

The Edward may be still fair England's king.

But day's bright beams doth vanish fast away,

And needs I must resign my wished crown.

(*Edward II*, V.1.59~70/下線筆者)

を見ると、王と太陽のアナロジーに基づく詩情あふれる哀切な台詞は、同時に、王が国庫の「王冠金貨」を蕩尽することで、その政治力を支える経済的基盤を失い、結果として太陽のように輝く「王冠」を失うことになったという、きわめて現実的な事象を連想せざるを得ない。

8 結論—辺境の富と文化的中心へのあこがれ

マーロウ戯曲においては、金銭は旧来の身分階梯を流動化し、再編する力を持っていることが示される。また国庫の金と統治者の力量は、国家を機能させて行く上で、王の聖性より大切であるということが明確に示される。マーロウ戯曲の富の多くは、文化の中心地から離れた場所に積まれた富である。*Edward the Second*, *Dido*, *Queen of Carthage*, *The Jew of Malta* において、財宝は辺境の地に堆く積まれている。しかしマルタ島の金は、世界の中心とも言える大国の人々をマルタに引きつける磁力を持っている。自らをマルタ島を領有するスペインに代表される、キリスト教社会の権力秩序の枠外にあると見なすバラバスは、世界には政治による支配とは別に、経済という別の枠組みに基づく支配方法があることを示唆する。現実には二つの力は複雑に絡み合い、相互依存的である。マルタにおいて金銭は常に政治および宗教と連動している。

Edward the Second のフランス系寵臣ギャヴェスタンは、ロンドンの街や住民を好まず、それでもロンドンがエリジウムに思えるのは、「極地の太陽」である英国王エドワード二世がそこに住まうからだという。彼が王の心を捉えるため企画するのは、ヨーロッパ文化の中心地であるイタリア風の仮面劇であり、身につける衣服や帽子もイタリアン・ファッションである。ギャヴェスタンが辺境の地の王とそのアナロジーである太陽／金銭に引きつけられたように、フランスの貴族たちも英国の「富」の誘惑に負け、フランス王の妹を裏切る。

Dido, Queen of Carthage では、イーニ阿斯は不実な蚕食者として描かれ、アイアーパスは誠実な求婚者であることが強調されている。作者はダイドーと妹アンナとの対話を通して、なぜダイドーが「豊かな」ガエトウーリ王アイアーパスを嫌い、無一文のイーニ阿斯を愛するのかという理由を明らかにする――

Dido. Is not *Aeneas* faire and beautifull?

Anna. Yes, and larbus foule and favourles.

Dido. Is he not eloquent in all his speech?

Anna. Yes, and *Iarbus* rude and rusticall.

(*Dido*, III.I.63-66)

The Aeneid では噂の女神の撒き散らす噂でダイドーとイーニ阿斯の関係を知ったアイアーパスは、父であるアンモーン神⁽⁸⁾に、「私はジュピターのために百の神殿と祭壇を建立した。私の民は饗宴の時には葡萄酒を地に注ぎ、供えものとした。その私の帰依は無駄だったのか」(*Book IV*)と訴えかける。ヴェージルにおいても、アフリカの王であるアイアーパスの土着性が伺える箇所がいくつかあるが、特にマーロウ作品では、アイアーパスの敗北が、文化の中心地であるトロイ出身の“faire”で“beautiful”なイーニ阿斯に対する、彼の属する文化、および彼の外見の辺境性のせいであることが示唆されている。

Doctor Faustus では上空からローマを見たフォースタスは、湾曲して都を流れるテヴェレ河と、河に架かる四つの橋を見て、墮落した宗教都市の姿に、同じく河に取り巻かれた地獄の都の姿を重ね合わせながらも、「光輝を放つ、壮麗なローマ」の偉容に感銘を受けざるを得ない――

Faustus. Now, by the kingdoms of infernal rule,

Of Styx, Acheron, and the fiery lake

Of ever-burning Phlegethon, I swear

That I do long to see the monuments

And situation of bright splendid Rome.

(*Doctor Faustus*, III.1.44-48)

すでに引用したフォースタスの故郷の都市についての計画—「ライン河を引いて美しいヴィッテンベルクを取り巻かせよう」、「大学を絹で満たし、学者たちを華やかに装わせよう」—についても、国防という視点とともに、北の学都をローマの水準にまで高めようという気概が感じられる。フォースタスは悪魔との契約の二十四年が終わろうとするとき、学友たちのために宴を催し、彼らの願いを聞きいれて学寮にトロイのヘレンを呼び出す。このシーンにおいても、北国の大学で長年、古典研究に勤しんできた学者たちの、ギリシャ文明の精髓を目の当たりにしての感激が感じられる。

このようにマーロウ作品では、辺境の人々の中央文明へのあこがれが見られる。それは富を蕩尽し、あるいは悪魔と契約を結び、身を滅ぼしてでも、手に入れる価値のあるものである。一方辺境に積まれた富は、その場所を世界の中心にする力を持っている。*Edward the Second* では、フランスの貴族たちは英国の金の前にプライドを捨て、*The Jew of Malta* では、地中海に浮かぶ小島にすぎないマルタは、世界中から莫大な財宝が流れ込むバラバスの執務室カウンティングハウスのせいで、世界の中心であるかのような錯覚が起きる。彼は「莫大な富の所有」という、王権に比肩する価値を軸に、地中海各地のユダヤ大商人たちと結びついている。この辺境性の認識と中央文化へのあこがれ、およびこれとは逆に、時代と価値観の変化につれ、シフトしていく中心点という意識が、マーロウ戯曲の一つの特質であると考えられる。このことは当時の国際社会における英国の位置を反映しているものと思われる。

註

- (1) Constance Brown Kuriyama は、2002年に出版した伝記の中で、マーロウの金銭に関するエピソード、および、晩年のマーロウの経済状況について詳述してい

- る *Christopher Marlowe, A Renaissance Life* (Ithaca: Cornell UP., 2002),特に Chapter 7. *A Trim Reckoning* (pp.120-139) 参照.
- (2) *The History of the Damnable life and the Deserved Death of Doctor John Faustus* (Hildesheim: Georg Olms Verlag,1985) 参照.
- (3) Christopher Marlowe, *Doctor Faustus : A-and B-texts (1604, 1616)*, eds. David Bevington and Eric Rasmussen (Manchester: Manchester U.P., 1993), pp185, foot note 参照.
- (4) ペルシャ国王の称号について, *Dramatis Personae* では“King of Persia”であるが,引用部分にも見られるように“emperor (1.I.II.166)”と呼ばれている箇所もある.本論では *Dramatis Personae* の表記に従う.
- (5) T. McAlindon, *English Renaissance Tragedy* (London: Macmillan Press Ltd.,1988), pp 99-100 参照.
- (6) Christopher Marlowe, *The Jew of Malta*, ed. N. W. Bawcutt (Manchester: Manchester U.P., 1990), p.121, foot note 参照.
- (7) モーティマー姓の起源が,十字軍遠征にちなむ *Mortuum Mare* (L=the Dead Sea)であると誤った俗説については,C. R. Forker が,Christopher Marlowe, *Edward the Second*, ed. Charles R. Forker (Manchester: Manchester U.P., 1994) foot note, p.206 で詳述している.モーティマーの台詞は,単に自分が由緒ある家柄の出であることを誇り,成り上がり者のギャヴェスタンを見下すための言及であるとも考えられる.しかし同時にこの台詞は,歴史に見られる英国の,欧州大陸以外の国々との関係を考えさせるものでもある.Shakespeare の *Richard the Second* においても,国外追放になったノーフォーク公爵 Thomas Mowbray が十字軍に参加して連戦し,その後ヴェネツィアで病没するという印象的なエピソードがある.ちなみに Mowbray が国王に別れを告げるときの台詞—Then thus I turn me from my country's light, / To dwell in solemn shades of endless night (*King Richard II*, I.III.176-177) を,追放を解かれて帰国するときの,ギャヴェスタンの台詞と併せて考えてみると面白い.

- (8) *Ammon*: an African god, identified with Jupiter; whose son Iarbus thus is, Virgil, *The Aeneid*, trans. C. Day Lewis, notes. Jasper Griffin (Oxford: Oxford U.P., 1998), p.414 参照.

資料 1

The Complete Works of Christopher Marlowe Vols. I,II&III, ed. Roma Gill (Oxford: Clarendon P.,1987)

Christopher Marlowe, *Doctor Faustus : A-and B-texts (1604, 1616)*, eds. David Bevington and Eric Rasmussen (Manchester: Manchester U.P., 1993)

Christopher Marlowe, *Tamburlaine the Great*, ed. J.S. Cunningham (Manchester: Manchester U.P., 1999)

Christopher Marlowe, *The Jew of Malta*, ed. N. W. Bawcutt (Manchester: Manchester U.P., 1990)

Christopher Marlowe, *The Jew of Malta*, ed. James R. Siemon (London: A&C Black Limited, 1997)

Christopher Marlowe, *The Tragedy of Dido, Queen of Carthage*, ed. C. F. Tucker Brooke (London: Methuen & Co. Ltd, 1930)

Christopher Marlowe, *Edward the Second*, ed. Charles R. Forker (Manchester: Manchester U.P., 1994)

資料2

Constance Brown Kuriyama, *Christopher Marlowe, A Renaissance Life* (Ithaca: Cornell UP., 2002)

The History of the Damnable life and the Deserved Death of Doctor John Faustus (Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1985)

T. McAlindon, *English Renaissance Tragedy* (London: Macmillan Press Ltd., 1988)

Virgil, *The Aeneid*, trans. C. Day Lewis, notes. Jasper Griffin (Oxford: Oxford U.P., 1998)

Virgil, *The Aeneid*, trans. David West (London: Penguin Books Ltd., 2001)

泉井久之助訳「アエネーイス」, 『世界古典文学全集 21』 (筑摩書房, 1986)

Raphael Holinshed, *Holinshed's Chronicles of England, Scotland and Ireland in Six Volumes*, Reprint of the 1807-08 ed. printed for J. Johnson, London; with new introduction (New York: AMS Press Inc., 1976)

William Shakespeare, *King Richard the Second*, ed. Peter Ure (New York: Methuen & Co. Ltd, 1982)